

價格釘付

一 何故釘付にしたか

- B たうとう價格釘付になりましたね。
- A 價格に、運送貨に、保管料に、保険料に、賃貨料に、加工賃に、賃銀に、給料に……
- B 皆な釘付ですか？
- A さうだよ。例外には生の魚類、野菜とか、書畫骨董とか、土地建物、有價證券など價格の算定しにくいもの。それに生絲の輸出價格といふやうに、關東州、滿洲及び中華民國……一口にいへば圓ブロック以外の國々との輸出入の價格であるとか……
- B それから税が上つたためとか、又輸入價格が著しく上つた時とか……
- A よく知つてるね。
- B いやここに書いてあるので……それで一寸伺ひますが、給料も上らぬ、昇給はなしといふ

事になるのですか……

- A 安心したまへ、一定の期限が來て昇給するのはかまはないよ。よく職工の取り合ひで途方もない給與をする例などがある、あれがいけないのだよ。
- B それから今までに公定價格のきまつてるものは？
- A それはその公定價格のままであり、又公定價格がかはればかはるままになるのだよ。物によれば業者間の協定價格、協定賃金も認可を得れば有効だよ。
- B ですかね？
- A つまりね、中央物價委員會で随分いろいろな品物の公定價格をきめた。しかし數限りない品物に萬遍なく公定價格はきめられない。
- B その通り。
- A 支那事變はつづく、だんだん品切の氣配があるといふので、賣り惜しみと買ひあふりが次第に物價の値上りをあふつてきてる。
- B その通り。
- A 軍需品として物資は買上げられる、一般に品物は不足がちになる。そこへ軍事費として巨額のお金が民間にふりまかれる。民間の消費は次第にかさんでくる一方だよ。

B さうだよ。

A そこへ歐洲の戦亂勃發といふ事になつた。さあ此前の歐洲大戰の夢を見て、商人の思惑取引が盛んになる、このままはふつておくと、それこそ物價は拍車をかけられて、ぐんぐんと止め度なく上つてゆく……

B いはゆる悪性インフレとなりますな。

A 物價は無茶苦茶に上り出す、それだけお金の値打がドカ落ちになる。それちや軍事費の豫算は認められても、金の價が逆落ちになると、いくさはできない。我々の収入にしても、半分か十分の一に減じるとなると、財政經濟も國民の生活もめちやめちやになる。

B ここに於てか九月十九日の閣議により國家總動員法が發動して、その前日十八日の價格を以てすべてを釘付にしたといふ事になる。

二 釘付になつても關取引になつては

A 大きにごくうさま……それでこの釘付は一時的の應急策で有効期間も一年間としてある。といふのはその間に品物の適正價格による統制を實施して本格的に建直すのだよ。

B いやありがたう、大凡は分つたやうだよ。ところでこんな事なら、もつと早くから釘付に

して貰ふと、これまでの物價騰貴にはならなかつたのだらうが……

A 正にその通りさ……しかしさう早々からやるとなると、早まりすぎるあわてすぎるといふ小言も出よう、今度は歐洲大戰勃發の爲、もはや一日もおくらはならないといふのでな。

B そりや分つてる。分つてるが、しかし今度はいくら歐洲大戰になつても、日本は此前のやうにうまい汁は吸へないでせう。

A さうだよ。此前は歐洲から金に絲目をつけずにとしどし註文がくる、そこで成金景氣も生れたが、今度はいくら註文が來ても、日本は滿洲事變以來、ことに支那事變で品物はあらかた出拂つた……

B 今度は註文があつても引きかへるモノが足りないといふのですからな。

A さうだよ。そこで何よりも考へなければならぬといふのは、支那事變のため、又歐洲方面の註文に應じるため、トコトン物資の節約を強行するといふ事だね。もし消費が盛んになればいくら物の値段が釘付になつても、買手はあふる賣手はしぶる。物資益々缺乏して事實は矢張り關取引になる。

B だから今度は賣手ばかりでない、營業に關するものは買手をも取締る事になつてる。

A いくら買手まで取締つても、賣る品物が少いが買ふ註文が多ければ、結局關取引になりや

すい、釘付々々といつても看板だけになるのだよ。

B そりや困るよ。

A だから根本は、いくら軍事費がまき散らされても、我々はこれを貯蓄して公債の消化にふりむける、裏からいへば消費を節約する、代用品で我慢する、我々のくらしを引きしめる、廢物の利用につとめる、註文をうんと少くする事だよ。

B そりやよう分つてる……

A だがなかなか實現性が乏しい。

B 全くだよ。一體どうするとよいのかな？

A この程物價の委員會であつたか、席上の茶話に出たスフ談を御披露するが……

B その事その事、概念的な理窟より、さうした實例茶話はケツコウ歡迎するよ、ね君話してくれたまへよ。

三 タチ屑、綿ポロ、古綿

A 鐵やゴムに公定價格をきめると、それは統制されてるが、今度は屑鐵や古ゴムの値が途方もなく飛び上る。そこで屑鐵や古ゴムまで統制して公定價格をきめる事になる。

B なるほどそれで分つた！

A 何が？

B 二三日前の新聞に木綿のタチ屑や綿ポロや古綿、さては紙屑などの販賣最高値段が發表されてゐたのが……

A さうだよ、立派に織り上げた反物よりも、屑もの端切れなどの方が値がよくなる。統制で抑へられてる反物をほぐしてタチ屑にする方が、却てよい値に賣れるといふ珍現象になつてくるのだよ。だから今度屑類も統制して、かれこれ二割から四割方値段を引下げたよ。

B 一體綿ポロなどは何に使ふのかね？

A そりや機械類を拭くために、又そのまま染め上げたり然るべく加工して古着にして賣り出す、中には洋紙とかセルロイドとか、消毒綿とか、ハジキ綿などの原料にする……

B そんなに澤山あるのですか？

A 當局の報告によると屑類が一年に約四千九百萬貫目、その代金が約八千萬圓にのぼるさうだね……

B 随分なものですな……

A そこへ、さうした屑ものを出す方でも、今までのやうに卸してくれぬから、屑ものは一層

値が上る。毛織物などでも同じやうにな……

B ははあ肩だからとて馬鹿になりませんな。

四 紺足袋とスフの浴衣

A この程も或る人の話に、端切れタチ屑には色物が多い。だから黒に染めなほせるが白といふわけにはいかない。だから、もし足袋も白に限らない、紺足袋でよいといふ事になると大分融通がつくというてゐたよ。

B 僕などはいまだ白足袋はいた事はない。

A しかし婦人は困るといふのさ。しかしスキヤキ屋の女中さんは紺足袋だからよからうとか、紫にすれば元祿踊りの藝妓だつてはくぢやないか、婦人用は皆な紫にするがよいとかね……

B なるほど一案だね……

A それから例のスフ、これもいろいろ文句をいはれるが……

B 何分にも水に弱い、ちぢむからね……

A この程商工省の繊維工業試験所の専門の技師の話では、今年の規格で整理された六十種の浴衣地につき調べて見ると、わざと泥をはね上げて、さてゴシゴシ洗つて見たら、唯一種だけ耳

が痛んださうな。勿論水には木綿は強くなるが、スフは反対に五割方弱くなる。

B でげせう！ だから……

A まあ後を聞いてくれ。スフは水でのびる、そののびたまままで乾かすからちぢむ、つまり乾かし方の問題になる。それから皺のよるといふことはスフに限らない、ただ今まで評判を悪くしたのは一乃至二パーセントの屑ものが出る、それまで交せて織り込んだ、これは問題なく悪い、だから此方は統制して將來なくせしむるといふのだね。

B しかし水分を吸収すると、あとがゴワゴワする、だから赤坊には困るといふので、大分婦人たちが聲をあげてましたよ。……あのオシメでね……

A スフは木綿よりあたりは柔かであり、餘計に水分も吸ふから、水分を吸うたあとのとりかへさへ早くすれば、却て木綿ものよりよいのだが……

B ところがオシメなんか、ありやうは、いつもさう右左と取りかへられないからね……

五 スフの特殊加工品と綿の總動員

A そこで今度試験所で特許になつてゐる特殊法によるスフを奨励することになつた。今度新聞に発表になつてゐるのはその特殊加工品で、これは皺はよらないちぢまない、水に浸しても強度は

二十パーセント減に止め得る、乾いた時は四十パーセント強度が増す、ちぢみも七パーセントから一パーセント以内になる。

B いやにスフの肩を持つね……

A なにも肩を持つわけぢやないが、代用品が必要となつてきた、その代用品が値段は安くても本物よりよい、そんなうまいチョコボ一はないよ、だんだん改良してゆくそれまでの辛抱だよ、お互ひにもう二年越し戦争してるのだよ、戦争を……

B 分つてるよ、分つてますよ。

A 尤も綿についてもまだ相当資源が民間には散らかつてる。

B 我々の手許にも。

A さうだよ、お互ひの家に押入へしまひ込んである綿入、ドテラ、蒲團、座蒲團などに、餘分になつてるものが多少ともあるのではなからうか、かうした状況の下では、一つめいめいの家から吐き出して見るのだね。丁度金につき試みたやうに……

B そりや賛成だね、全く押入戸棚の場所ふさぎになり、蟲干などの手数をかける、引越の時には荷造り賃や運賃がかさむばかりで……

A 次第に洋服常用のくせが多くなつて來てるから、餘分になつたものも相當にあらうよ。

B 廢物利用だ……大いにやるべしだね。

A いづれにしても、支那事變あり歐洲戦争あり、物資は足りなくなるばかりだよ。だから一方が物の値段の釘付けは止むを得ないが、つまるところは物の不足のないやうに、それには一にも消費の節約、二にも消費の節約、それには代用品愛用、廢物利用……考へて見るといづれも平時に於ても實行さるべきであつた。今まであまり無駄な勿體ない贅澤な生活をつづけすぎてゐたね。

B O・K、大賛成、同感だよ。

(主婦之友、十四年十一月號)

フリソデは無駄の標本

いつでも結婚式は簡單にやるもの。ことに披露の宴は極く親しい範圍にとどめる。

献立など一皿主義にてよろしく、服装も平服にてよろしく、新婦のフリソデなどは無

駄の標本なり。断じてやらない事。

(婦女界、十四年十月號)

お米の話

一 お米が無くなつたといふあわて方

B 君はこの時局に直面してゐる日本の食糧が自足自給されてゐるのは何よりの強味だといつたね！
A いつたよ。

B 食糧の自足自給は非常な強味であるが、そのためまた幾分緊張味を缺く嫌ひがあるといつたね。

A いつたよ。それが、どうしたい？

B ところが肝腎の米の自足自給が危なくなつて来たぢやないか？ お米が足りなくなつて来たぢやないか？

A あわてぢやいけないよ、足りなくはないよ。

B 御戯談でせう、早害で朝鮮では減産一千万石といふぢやありませんか？

A そりやさうだよ。

B だから足りなくなつたぢやないか？

A まだなりはしないよ、なつては來ないよ。この秋の米がとり入れになる、それを食ひつくる來年の端境になつての話だよ。今火のつくやうに足りなくなるなどいふのはあわて過ぎるよ。今年は端境の峠を越してもう新米が出廻つてくるよ。

B ところがそのお米が出廻らないといふ噂がある。だから小賣店もお米を賣り澁り出しているよ……

A そんな話は聞かんぢやない。それはセツカチで氣が早い、あわて過ぎる連中の話だよ。

B しかし、ただあわて過ぎる、あわて過ぎるぢや……

A よろしい。一と通り今日までの成行きと、これからの我々の心がまへにつき話して、いかにあわててゐるか、承つてもらはう。

B 承らうぢやないか。

二 軍用米はなぜ餘分に入用なのか

A 先づ、お米の消費高が時局のために著しく増して来たことは事實だよ。第一に軍用米だね。

B 戦地へおくる……

A さうだよ。

B 内地で米を食べた兵隊さんが戦地へ出かけたのだから、出す入らずでせう？

A ではないね。兵隊さんがすべて内地で白米を食べてゐたとは限らない。

B それもさうだね。

A 戦争するのだからふだんより澤山に食べるよ。何よりも、戦地のお米が右から左へと手一杯くらははいけない。相当の日子を支へるだけの豫備米がなくてはならず、それとても軍隊の數もかはらず、一つ所に定着してゐれば始末がよいが、軍隊は動いてゐるだらう、兵士が第一線に奮闘するときは却て食糧の手當に恵まれぬことが少くない、その動いてゆく軍隊のあとを、おくれないうやうに追つかけて、食ひはぐれのないやうにといふと、お米はかなり餘分に用意されねばならない。

B なるほどこりや理窟だね。それなら現地の支那米をあてがつたら……

A ところが北支ではお米は足りない。中支は相當あるにはあるが、例の南京米は日本人に向かない。幾分交ぜるといふ程度らしいね。

B なるほどこりや理窟だね。

三 米の消費の激増した理由

A そこへ内地はもとより、朝鮮、臺灣、滿洲と、到るところ米の消費量が、ぐんぐん上つてくる。

B とはまた何故に？

A 一つは都會地方面では、重工業の發展などに伴ひ金廻りがよくなる、そこで地方から出て來た、雜穀など常食にした連中も、白米へ肩代りする。都會地では今さら米から粟や稗でもあるまいからな。

B 地方では？

A 地方でも早い話が現地出征や都會地へ出稼ぎする。人手がへつてもその割合に生産額はへらない。そこへ農産物の値も上つてくる。殊に昨今の繭の値などは上り過ぎて來た。それだけでも米食へうつり易い。

B その上に……

A その上に米の方は、米穀統制で三十八圓と金縛りになつてゐる。そこへ麥、粟、小麥、大麥などは相當値上りして來たから、味のよいお米の方が却て安くなつて來た。これぢや米食に片寄

らざるを得ないぢやないか。

B なるほどりや理窟だね。米の値安といふことが逆効果になつて來たのだね。

A さうだよ。昔ならば米の方がぐんぐん高くなる、そこで地方では新に米食になるどころではない、今まで米食してゐた者も、代用食をとつて米を市場に出すべきのが、今度は全然逆になつたぢやね。

四 内地・臺灣・朝鮮の米作

B それぢや外の雜穀類の値を下げるか、さなくば米の値を上げるのだね。

A お説の通りだが、物價が皆ならして上つてゐるのに、雜穀の値を下げることはむづかしい、というて米の値を上げ出すと、それへついてすべての物價の氣配が強くなつてくる。

とにかく、二年餘の事變にぶつかつて社會不安の色のないのは、先づ何よりも米價が割安だからで、これがもし今までお米の統制がなかつたなら、事變勃發以來幾度堂島や蠟穀町の米穀取引所の立會が停止となつたか知れないだらう。米價が五十圓、六十圓、七十圓とうなぎ上りになつて、それこそまた焼打が始まつたかも知れないよ。

B それを思へばまだ忍ぶべし、といふのだらうがね。

A とにかく米の消費増が著しいから、政府は増産計畫を立てた。昭和十三年の米穀年度……十一月からあくる十月まで……の内地の消費額が既に八千萬石を突破することとなつたから、千三百七十萬石を朝鮮、臺灣から補給されてゐた。それで十四年の米穀年度は、生産額を前年より四百萬石増して、六千三百四十六萬石から六千七百四十萬石へ目標をおくことにした。

B ところで實收は？

A まだ分らないが、今までの見積りでは六千四百五十六萬石といふから、平均より増してゐる。しかし何分九州、中國方面旱害のため豫定の増産額は得られなかつた。

そこへ朝鮮の大旱害だよ。朝鮮は、二千二百萬石乃至二千四百萬石の産額を期待したが、朝鮮一帯は今までにない大旱害で、七十萬町歩の土地が不作となり、實收總額が一千三百九十九萬石といふから、約一千万石の減産となつたね。

B そこで外地米の内地への移入高は？

A 最近三年間の平均は

内地生産高	六千三百五十萬石——六千四百萬石
持 越 高	八百五十萬石
内地消費高	七千七百五十萬石

この不足高を、

朝鮮より 八百五十萬石——九百萬石
臺灣より 四百八十萬石——五百萬石

の移入により、補ひをつけてゐたね。

五 酒造米減、七分搗、汽車辨當

B そこで今度は？

A 臺灣は先づ出す入らずとして、朝鮮が大減收だから、朝鮮でも代用食節米をして、なにがしか内地へ移入をはかる。内地では約百萬石の増産の外に酒の造石高減、これは百萬石とかいつてるが、現實に造酒高をへらす……

B 左黨は悲鳴をあげるね。

A ウイスキーやブランデーを飲むやうに珍重して飲むことにするのだよ。杯洗へ流し込みなどは全廢する。黴菌傳染、飲酒無理強ひとなり易い獻酬もやめる。

B この際止むを得ないかね。

A いやこの際に限りたくないね。そこへ例の七分搗にする。四斗入り一俵を精白して五七疋

の白米を得たのを、七分搗にして五九疋となる。これを内、臺、鮮の産米一億石にあてはめると、三百五十萬石浮くといふが、これは造酒制限のやうに正確にはいかないよ。

B 精白米廢止は榮養價を増し、なほ一年約一萬人といふ脚氣病亡者の命をつなぎとめる。

A 全く君のいふ通りだよ。それから極く輕少であらうが、勿體ないのは汽車辨當だね。

B たしか昭和九年しらべで、汽車の辨當、船など一年に一萬七千石、それから普通辨當の御飯の百分の三、特殊辨當の方は百分の一残されるところとして、三百石六斗と六十八石一斗、計凡そ三百七十石が残される、棄てられる。

A よく細かい數字を覚えてるね……

B いや、君の「これからの日本」の中にあつたのを、ここに抜書きしてあるのだよ。

A それはそれは、僕の方は却て忘れてしまつてるよ。ところでその殘飯の處分法についても考へられるが、も一つ容器を小さくするか、または大小とわけてみるのも一策だらうね。なにがしかは減じられよう。しかし問題はあの多數同乗の車中で食ひ残しを棄てる、それを帚ではき立てるといふことだね。海外から見えた外人の十人が十人直感することは、貧しい日本人のあの無駄、勿體なさだといふが、全くその通りだよ。これは辨當の改善も改善だが、乗客が手辨當で乗車するくせをつけるといふことも考へられるね。

六 雜穀とお粥とお米の買ひあふり

A そこへ他の雜穀の代用食といふことになるが、雜穀類は今物價委員會で直接關係してゐるから、あまり立ち入つたことはさし控へる。ただ小麥は増收になつてゐる、そして滿洲へも送り出すが、それでもなほ百萬石くらゐは新に内地へ向けられる。また朝鮮では早りの田へ蕎麥を植ゑつけて、これも百萬石くらゐの増收をあげてるといふくらゐに止めておく。

B しかしそれだけぢや、まだ……

A さうだよ、そこでお粥説も持ち上つてゐる。これは毎朝辨當持ちで出かける主人もあり生徒もあり、お粥と普通の御飯と仕分けるのも困るだらうし、力業する連中にはお粥腹では頼りないだらうから、一樣にいかないが、全國の總世帯で何割でもお粥をはじめたら、これは相當な節米になるであらう。そこへ臺灣では二期作で、第一期作は來年六七月頃に出廻る、その第一期作の増産といふことも考へられる。あれやこれやで相當の持越米はなければならぬが、それも見込んでどうやら凌ぎがつく、またつけねばならない。どうしてもいかぬときは、最後の切札は外米買入れだが、値頃があり船腹があり、爲替關係もあるから、これは避けられるだけ避けねばならない。まあそんなことにならずにすまいたいね。

B いろいろ聞いてみると米の自足自給の苦しいことも分つたが、それは來年端境期のことだから、今からさうあわてるに及ばないといふことも分つたね。

A ところが昨今くだらないデマが飛んで、旱害減作の聲におびえて買ひあふりにかかる。全國通じて米の産額過剩の縣が三十六縣、不足の縣が十一縣、この不足の地方から、小賣屋、問屋、縣の當局でも買ひあふりにかかつて出先で競合になる。さうでなくとも農家では米の値が割安であり、先高を氣がまへる。そこへ懐る工合もよいので持ちこたへる力が強くなつてゐる。過剩になつてゐる縣でも買手を途中で食ひ止めて、賣り崩さぬやうにと警戒する。かうなると現在は少しも米の不足はありやうもないが、全國農家が一俵づつ賣り惜んだとしても巨額に上つてくる。所によると現實にお米がないといふこともあり得る。

B 現に此間〇〇でさうした話を聞いたが……

A それだよ。〇〇の〇〇工場で今のうち買つておかなければと、二萬五千俵を買ひ占めてしまつたから、その土地ではすぐ米がなくなつた、そこでまたその工場から、米を吐き戻さしたといふ話だよ。

B どうもさう風聲鶴唳でおびえ出しちややり切れないですな。

七 凶作米は箆筒から

A さうなると日本人は氣が短い、困つたものだよ。これが歐洲諸國のやうに、いつも外から輸入を仰ぐ國々だつたらどうなると思ふ。しかしさういうてただ困る困ると慨嘆してただけではおつ付かない。昨今政府でも着々方針を定めて、各府縣相互間に競合のないやう、有無相通するやう配給機能を充分に活動させることになつてよ。

B どうして？

A 地方々々で過剩縣と不足縣とを有無相通せしむべく、それぞれ按配してリンク（連繫）する、競合などさせない。そして更に政府が米穀統制法を發動して、出廻り期に産業組合、農會、米穀會社などの機構により、集荷動員をはじめめる。

B 政府の、米買上げですな……どのくらゐです？

A あらごなし一ヶ月分一千萬石といふやうなことが考へられるが、まあそんなことはキツカリ何萬石と區切るに及ばないよ。政府が配給の音頭をとると決れば、農家も理解して手放す。一般消費者も安心して、買ひだめなどとあわてなくなる。それでよいのだよ。

B とにかく物價といつても、織やゴムや毛絲がどれだけ上つても一般生活にさしてこたへな

いが、食糧殊に米となると、直接日常生活の脅威となるから、遠からずとか、なるはずだよなどといはずに、米の對策だけはテキパキと一日も早く方針を明示し、これを現實化してくれなくちや……

A 奈くだよ。しかしそれにしても、一般民衆もあわてないやうにしてほしい。どうも全國の民衆が一世帯で一依づつ買ひあふれば、どんなに名案を立ててもオヂヤンになる。今から空聲であわてまくつて賣り惜んだり、買ひためたりすると、

「凶作米は箆筒から出る」

といふ古い諺のやうに、來年の六七月頃になつて、逆に米が溢れ出てくるといふやうな事もないとは限らない。

B いづれにしても今日の政務は、外は支那事變の解決にあり、内は米の對策樹立にあり。

A 同感々々！

B 政府は一日も早く對策を樹立すべし、民衆はあわてまくり、徒らになますを吹くべからず。

A この原稿が印刷になつて現れる頃は、

B はやケリがついてゐるやうにありたいですな。 (二四、一〇、二七、朝風社、主婦之友、十四年十二月號)

皇紀二千六百年の世界

一 日本に生れた有り難さ

R 元二千六百年の新春を迎へて、お目出たう。

A お目出たう。だが本當にこのお目出たうといふ心持を國民全般が合點してゐるかね？

R といふと？

A だつて君にしてが、どうしてこの世の中へ生れて來たか、といふことを考へたことがあるかね。

B さあ……

A お前はどこへ生れたい？ ハイ私は日本へ生れたい、いつ頃生れたい？ ハイ明治大正昭和の御代に生れたいと出生志願書を差出して、願ひのおもむき聞き届けられる、それで生れて來たわけではない。

B その通りだよ。

A ただなんとなく、ヒョコリと無邪氣に日本へ生れて來たのだよ。

B さうだよ。

A これが太平洋や南洋の小さな群島の椰子の木の下に赤黒い土人として生れても、北極の氷りついた島で青白いエスキモーの子となつて生れても、それもこれも天命だよ。

B さうだよ。

A エチオピアに生れるも一生ならば、英國の下で息づいてる印度に生れるも一生、蒙古西藏の奥地ゴビの沙漠の中に生れるも一生。

B 歐洲に生れたとしてが……

A いつも列強の喰ひ物にされるバルカンの諸國に生れるも一生、血で血を洗つて全土を戦塵のために焦土に委したスペインに生れるも一生。

B 九州くらゐの小さい國で、強國の間に挟まれ、戦々競々四方八方氣がねしてオチオチ眠れないエストニア、ラトヴィア、リスマニア、さてはフィンランドやデンマークやオランダやベルギーやスウェーデンなどに生れるも一生。

A その通りだよ。それなら強國仲間にしても英佛獨伊、さてはソ聯の國々、大きくもあらう

強くもあらう、しかし互に境を接して、他國の飛行機は一二時間ですぐ自國の首都の空に襲來する眼と鼻の間に肩をならべてゐては、氣のやすまる時がない。

二 支那事變と歐洲戰爭

B さうした國々にくらべたなら、極東の天地に高見の見物、戰爭はしても日本海や支那海をへだてた他國の土であり、戦へばいつも勝つときまつてる、話はあまり旨すぎる、建國ここに二千六百年、萬世一系の皇室をいただき、いまだ一度も外侮をうけない、さうした日出の國に生れたのだ。

A すつかり僕のいふ言を立てかへてくれて、いや全く御苦勞さま。しかもその日本でも、源平時代でも應仁や元龜天正時代でもない、平和だといつても士農工商釘付けになつた江戸時代でもない、世界に覇を唱ふるに至つた新興日本躍進のさ中に生れたのである。

B その新興日本の紀元二千六百年の春を迎へたのである。

A これがお目出たうといはずして……アアくたびれた。

B とはいふものの、支那事變はいまだ眼鼻がつかず……

A だからいつてるぢやないか、日本と支那は海をへだててゐる、先方には海軍はない、飛行

機も飛んで來ない、敵は四川の奥に冬ごもりだ、當方は連戦連勝してゐる。今や歐洲では英佛とドイツは五分々々の取組みである、それが互に境を接し、陸に海に空に、眼と鼻の間で息づまるツバゼリ合ひをやつてるのだ、彼と我とくらべたなら、我等は有り難いと思はねばならない。

三 食糧から見た東西

B そりや有り難いと思ふがね、もう戰爭も足かけ四年となるといささか……

A いささか何といふのだい？

B そのために、お米をはじめ物價はのぼり出す……

A それだよ、歐洲では主要食糧品は皆な切符制だ、この前の大戦ではドイツは食糧攻めにあつて、餓死者が八十萬人に及んだといふ話だ。それとくらべて見給へ、來年初秋の端境になつてどうかといふお米を今からあわてるなどは、手廻しでない氣廻しがよすぎるよ。

B 朝鮮の旱害一千万石の不作といふのが、かうした時節柄ひびいてくる、そりや内地は平作以上でも、まだまだ値上りすると賣り惜みをする、一方では買ひあふる。まあ、それもこの時局のかつですよ。一體支那事變なり、歐洲の大戦はどうなるのです？

A 今日は十四年十一月の二十五日だ、今のところ僕の占ひでは、支那事變はもう二年半にも

なつたから峠は越してる。このうへ戦争をつづけたといつても、もう先が見えてる、我々はあせらずに落ちつき拂つて見てをればよい。歐洲戦争は火の手が上つたばかりである、さし當りこのまま引分けともいかない。

B しかし、英佛側もドイツ側も戦争はしたくない。

A 誰も戦争をしたがるものはない、しかし騎虎の勢ひ、乗りかけた舟だ、戦争にしたくない、したくないが戦争になつたのだよ。見込ちがひではあるが、さていよいよ開戦となれば、さう簡単にお開きにはならないね。

四 見込ちがひの歐洲大戦

B 見込ちがひ？

A さうだよ、ドイツはソ聯と手を握つたとなれば、ポーランドも一議に及ばず頭を下げる、オーストリア次いでズデーテンの合併、チェッコやスロヴァキアを手の中にまろめたやうに無血で片付く、英佛もいかに口先でかれこれ文句をいつても、無血で電光石火片がつけば、もう兵を動かす暇がない、ただ開いた口が塞がらないだけである、さうした見込であつたらう。獨ソ提携がオースが入ると、今まで反共といふので敵呼はりをしてゐたソ聯と握手するのがをかしいと

か怪しからぬとか咎め立てするより、血ぬらずしてダンチツヒからポーゼン、シレジア一帯がまたまたころげこむといふので、ドイツは國をあげて歡呼の聲をあげたものだ。

B よく聞かされる話だね。

A ところがポーランドにして見ると、今度は英佛も黙つて見てゐないとはつきり宣言してる、チェッコとちがつて國も大きい人口も多い昔の歴史もあるポーランドが、オメオメお辭儀はできないと反つてしまつた。さうなればドイツも今更それちや當方の申込も撤回しますとはいへない。ちや力づくでもといふことになる。これがドイツ側の見込ちがひさ。

B それで英佛は？

A 英佛側は英佛側で、一方ではつきりとドイツがポーランドに手を出せば黙つてゐないとドイツへ宣言する、ポーランドには武力に訴へても助勢すると大ビラにかけ聲する、鳴物入りで動員もする、陸に海に空に攻防共に怠りなしと鉦太鼓入りではやし立てた。それはそこまで態度をはつきりと決めてかかれれば、さすがのドイツも今度は横車は押せない、また押させないといふ見込からであつたが、それにも拘らずソ聯と握手したので、ドイツは武力に訴へてポーランドに乗り込む、英佛も今更さうでござりましたかと指をくはへて引つ込めない。双方見込ちがひで泣く泣く戦争になりけりだよ。

五 ヲ聯は人のふんどし

- B そこでソ聯は？
- A 人のふんどしで相撲を取つてるのだよ。
- B ……………
- A いつばう（鵜蚌）の争ひ漁夫の利を占めてるのだよ。
- B ……………
- A うるさ形の連中を勝手につかみ合させて、おのれは高見の見物だよ。
- B もう分つたよ、分つたよ。
- A 君は商賣敵といふことを知つてるだらう。
- B 知つてるよ。
- A その商賣も交通不便な頃、互に土地がはなれてゐれば、お互に痛くも痒くもないが、交通が便利になると、互の利害が衝突しやすくなる。
- B 分り切つてるぢやないか。
- A 同じ商賣を東京と大阪でやつてゐた、今度は同じ東京でやることになる、それも山の手と

下町であつた、同じ日本橋京橋になつた、同じ町内になつた、たうとう軒をならべた、競争ますます激烈、摩擦は次第に強くなる。

B そんなことは分り切つてるよ。

A 今ドイツは東ではソ聯、西では英佛、南ではイタリーと境を接してる。今までイタリーと組んで、ソ聯英佛と敵對してゐた。そのうちにソ聯とも組むこととなつた。

B その通り。

A ソ聯は西にドイツと隣り、東では日本と隣り合つてる。この隣り合つてる國々は正直のところ皆な相手が強くてはうるさい、弱つてくれなくては困る、というて自分の血と汗でお隣の力を弱めるよりは、強い同士が勝手につかみ合うてくたびれる、當方は懐ろ手して見物するに限る。

B そんなことは分り切つてるよ。

六 濡手で粟のソ聯

A だからソ聯は、東のうるさい日本が支那と戦ふ、それが長引くほどケツコウである。支那も日本も強くなつては困る、その日支が相戦ひ相傷いてる、フレイフレイ日支戦争である。そこへソ聯を眼の敵にしてるドイツが手を握りに來た、英佛とソ聯とがつちり手を組むと、まさかに

ドイツもポーランドへ武力で臨みにくい、といつてあまり早くからしかも念入りにドイツと手を握ると英佛も手を引いてしまふ、そこで英佛と握手する態度をつづけて、英佛を強氣にしてどうしてもポーランドを助けねばならない破目に入れる、ドイツはドイツで内約してるから、ドイツも敢然とポーランドを攻める、ここに獨對英佛戦は首尾よくものになる、そして自分は混雜に紛れて、殆ど血を見ずに、ポーランドを分け捕りする。更にバルトの三國に強引に注文をつける、ドイツと境を接してるリスアニアとは共同防衛の約束まで結んだ、これは對英佛でない、ドイツに對するためである。今や彼は英佛對獨の大戦に、陰に陽に油を注いでゐる。

七 歐洲大戦の將來と日本

B そこで歐洲大戦はどうなるか？

A この大戦を左右するものは、ソ聯とイタリーと、それから北米合衆國と、更に日本だよ。

B でも近頃日ソの關係は少しく和いで來たといふが、ソ聯も西隣りのドイツの手を握れば、安心してよけいに我に強氣になつてよいはずだが……。

A ソ聯といふ大きな象の尻つぼが日本の尻つぼと樺太でふれてる、滿洲方面でもふれてる。しかし頭の方は西の方ドイツとにらみ合つてる、それだけに西の方に關心が深からざるを得ない。

しかも獨ソ手を握つたといつても、正直のところ、どちらも相手の弱まることを願つてる、といつてこれからの歐洲の情勢はどう變轉するか分らない。ソ聯としては食指の大いに動いてゐるバルカンでは、英佛獨伊といづれも巴巴と入り亂れ利害が紛糾してる、今攻防共に主力を西側に集めて臨機應變の處置をなすべく待機せねばならない。

B さうすると、日本としてはドイツの弱くなるのは考へものですね。

A ドイツが日本の弱くなるのを欲しないと同一理窟だよ。皆お互ごつこだよ。

A そこで歐洲大戦は？

A くだいね……日米ソ伊の動きによるが、今は戦争も火の手が上つたばかりだ、更にこの戦争に油を注ぐものもあらう、同じく兵火を動かして共に火中の栗を拾はんとするものもあらう。しかし、この前の四年半の歐洲大戦の結果は、負けたものも勝つたものも創痕深く共に馬鹿を見るから、仲裁は時の氏神といふから、今度は双方くたびれて來た時分、仲裁の詞に耳を傾ける頃になつて、休戦となるやうな氣がする。

B その時は誰が仲裁する？

A アメリカと日本——かね。

B いつになつたら？

A 來年のことをいへば鬼が笑ふよ、まあそれはそれとしてお手許拜見だよ。日本民族は今尊い試鍊をうけてる、とにかく相へだたつて利害がないと、相敵視して戦ふ機會もなく、さりとて手を握りたくも遠くはつながらない。相隣りすれば、打てばひびく、相戦ふこともあれば相結ぶこともある。日ソの關係だつて思想問題でウラハラになつてゐるが、必ずしも相戦ふことになるやら、却て相結ぶやうになるやら、國際關係は晴雨定まらず、複雑怪奇といふほかない。いづれにしても、日本は今極東の民族と互に手をつないで新東亞建設の歩を進めつつある。あせらず驕らず、息切れせず、足を地に踏みしめて、光輝ある紀元二千六百年を迎へるのだよ。

(一四、一一、二五、主婦の友 十五年一月號)

持久戰時代

初刷二千五百部



滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の

外地定價一圓九十八錢

* 落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へいたします。

昭和十五年七月十日印刷
昭和十五年七月十五日發行

定價一圓八十錢

著者 下村海南

東京市麹町區三番町一

刊行者 長谷川巳之吉

東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房

振替東京六四二二三

電話九段一四一五

東京市牛込區山吹町三ノ一九八
印刷者 森原芳雄

法學博士 下村海南著

朝鮮・滿洲・支那

四六判三八五頁
定價一圓八十錢

下村博士の話題の豊富なることは既に定評あり。その高純な識見に裏づけられた豊穰な常識と明徹な時代への洞察は時局を縦横に裁断して輕妙洒脱、自らその中に諧謔を生じて而かも深遠なる示唆に富む。本書は博士が先頃視察した朝鮮、滿洲、支那を語つて新東亞の將來を説き、慌しい世界の動きを打診して新日本の進路を指針する。一讀胸に落ち頭に殘る時局隨筆。

法學博士 下村海南著

東亞の理想

四六判五一四頁
定價一圓八十錢

列強睽目の中に敢然として立上る雄邦日本、その針路を照す無類の遠眼、これこそ正に舉國の指標である。肩の凝るほどの理論の書でない。豊穰な常識と高純な詩想とをもつて沁々と語られた時局隨筆である。大は支那事變の見透しから、小は市井の機微に到るまで、説き去り説き來る萬金の饒舌、しかも民族的香りをかき好箇の國民讀本である。

法學博士 下村海南著

生活改善

四六判四四五頁
定價一圓八十錢

博士の該博な知識、豊富な體驗、明徹な時代への洞察は、既に定評のあるところ、現下の我々が直面する重大な時局、複雑な社會の動靜を思ふ時、博士の所説に俟つところ、ひとしほ多きことを痛感せずにはゐられない。今や長期建設の時代、この民族の大事業を前に博士は烈々たる奮世の炬火を捧げて立つた。一言一句これ悉く眞率警世の言、舉國一致で熟讀すべき書。

法學博士 下村海南著

動く日本

四六判三五〇頁
定價一圓三十錢

最近の日本の政治外交經濟に關する主要問題は、悉くこれを捉へ、徹底的な批判と見透しとが下される。平明で達意の明文は誰にもわかり易く正に好箇の社會讀本とも稱さるべきものである。第一篇時局偶語篇、第二篇市井漫語篇、第三篇白雲流水篇、第四篇山と水、第六篇時局解説篇等で、書中の隨筆には博士の人格が偲ばれるゆかしい滋味が溢れてゐる。

法學博士 下村海南著

物の糧・心の糧

四六判五三九頁
定價一圓八十錢

現在ほど問題の多かつた時が稀であつたやうに、本書に含まれる問題もこれまでになく多く、且つまた、それらのすべてが我々の見逃すことの出来ない重大性を持つてゐる。複雑であり重大であるだけに、問題の抽出とその解析とは難事となるが、博士の筆鋒は愈々犀利を加へ、その大所高所に立つての裁断は、明快に我々の眼の曇りを吹拂つて呉れる。

堀口九萬一著

世界と世界人

四六判三七一頁
定價一圓三十錢

堀口九萬一氏の文名は老外交官としての命名にもまさるものであつて、その暢達醇雅な筆は今更云爲するまでもない。氏の中南米訪問は既に數回目のことであり、新しい印象は古くからの知識と相俟つて、ここに明哲なる中南米を浮彫にする。更にその他の各篇に於ては、永い外交官生活から得た珍らしい豊富な話題と深い文學的造詣から生れた滋味ある隨筆が展開される。

堀口九萬一著

外交と文藝

四六判三五〇頁
定價一圓八十錢

本書の著者堀口九萬一君は外交官生活三十年、東西南北の人である。朝鮮、支那は申すに及ばず、歐亞大陸、南北米大陸、其の足跡は、世界の凡有る隅々まで及んでゐる。而して君や、和、漢、洋の三學に該洽、最も詩人的天分と素養とに饒である。斯人にして斯著ある、如何にも長袖善舞、多錢善賈の諺に相應してゐる。ここに欣々然として紹介の筆を執る。(徳宮蘇峰氏評)

堀口九萬一著

游心錄

四六判四五〇頁
定價一圓

本書は外交官として永く歐羅巴諸國に滞在してゐた文藝趣味豊かな著者が、彼の地に於て見聞した文藝的な題材を捉へ之を興味深く叙述した隨筆集である。最初の論述「彼等の自然觀と我等の自然觀」は、西洋人と東洋人との間に於ける自然觀の根本的差異を豊富な引例によつて明快に叙説したものであるが、非常に有益なもので、特に我々東洋人を啓發する所が多い。

文學博士 得能 文著

隨筆集 淺人零語

四六判五六〇頁 定價一圓

博士は、この隨筆集を『淺人零語』と名づけて居られる。この言葉の出所を私は知らないが、多語なるは眞に深き所ではないといふことにあるらしい。されば此の名稱たるや、この隨筆集の實の實にあらずともいへよう。多語であるといふのではないが、この隨筆集に語られた言語を通じてよく語らざる博士の心の沈黙の淵の底が示されてゐるからである。(兒玉達實氏評)

文學博士 得能 文著

隨筆集 沈黙の疑問

四六判二九五頁 定價一圓三十錢

もし思想のリリシズムといふやうなものがあれば、得能氏の隨筆は正にその中核的生命を持つ。氏にあつては、事物は凡て明確な相と透徹した認識力なしには、その眼、その頭腦を通過することはない。氏ほど物を明確に裁斷する人はない。またその裁斷は、奥床しい氏の人格の光りを帯びて、深い味と明るい情感と、天稟の思想型が新鮮に泛び出るのである。

奥野信太郎著

隨筆集 北京

四六判二八七頁 定價一圓三十錢

畏友奥野信太郎氏こそ、まさに北京の隨筆を書くべき人であつた。この『隨筆北京』を讀む人々は、その教養の豊かさや、北京への愛の深さや、文藻の麗しさに感嘆することであらうが、それは決して一日にして成つたものではない。聴けば、きはめて幼いとき森嶋外の素讀を受けたといふ。そこに今日のこの本の生誕が約束されてゐたのではあるまいか。(阿部知二氏序文)

高橋 廣江 著

パリの生活

四六判二九〇頁 定價一圓三十錢

これは藝術と文化の都パリに遊學せる若き文學者の眞摯なる觀察と生活の記録である。無限の詩が囁き流れるセエヌの邊り、瓦斯燈照るモンマルトルの夜の雨、哀愁の果てにふと手にとりし葡萄酒の高き香り、マロニエの並樹道とモンパルナスのカフェ、それらのなかで、著者自身絶えずきびしい反省を感じつつ、日本の文化とフランスの文化との殆ど對蹠的な相違を考へる。

野口米次郎著

印度は語る

四六判二九〇頁 定價一圓五十錢

印度に招聘されて學術講演長途の大旅行を了へられた詩人ヨネ・ノグチは、その紀行文を先般『朝日新聞』紙上に連載せられ、多大の好評を以つて迎へられた。本書はその紀行文を骨子として、更に追加彫琢を加へたもので、そこには印度といふ古き歴史の國に咲き出でた文化の花、その特異な人情風俗などが、この詩人の新鮮な香りと共に取り出されるのである。

野口米次郎著

強い力弱い力

四六判三三四頁 定價一圓三十錢

本書はノグチが最近公表せる詩や感想や評論の連続的作品であり、なかには一世の視聽をあつめた有名なタゴールとの四回に亘る論争、汪兆銘に與へた烈々の詩等がある。それらはいづれも世界人ヨネ・ノグチにして始めて見出し得る高邁なる精神と主張とによつて貫かれ、出でては力強い男性的發言となり、入つては深き内省的隨筆となつてゐる。

賀川豊彦著

世界を私の家として

四六判三三四頁 定價一圓三十錢

本書は賀川氏が四度目の渡米をされ、アメリカからヨーロッパに渡り、世界一周旅行をして歸られた其の間の豊富なる經驗と見聞と研究とを集大成せるものである。社會事業家、宗教家、詩人、小説家、科學者といふ著者の様々な角度から見た世界の實相は遺憾なく描破され、更に經濟現象の克明なる解析、宗教界の動向、また精神文化の姿等、凡てが鮮明に寫し取られてゐる。

根津菊治郎著

ヘンの從軍

四六判三三四頁 定價一圓三十錢

これは著者が名譽ある從軍記者として北支戦線に決死從軍し、第一線將士と生死を共にしつつ、幾百里、山河を越えて戦場に參加した貴重な記録である。言語に絶する壯烈な戦、戦塵を直接肺腑に呼吸した輝ききべんの戦士は、茲に無量の感慨と感激を以つて、保定大會戦を中心とする聖戦の實相を記し、硝煙彈雨の中に高鳴る大和魂の偉大さと崇高さを傳へんとする。

吉田絃二郎著

わが旅の記

四六判四五頁
定價一圓三十錢

著者の全生命ともいふべき三十年來の紀行文を悉く集めたもの。旅は著者にとつて、あるときは人生逃避の精舎であり、あるときは未知の世界への欣求であつた。而して芭蕉の「野ざらしを心に風のしむ身かな」の心がまへこそは、つねに旅行く著者の心がまへであつた。本書はまたながひあひだ著者の人生の旅路の忠實な伴侶であつた今は亡き夫人への傷心の追憶記でもある。

吉田絃二郎著

わが人生と宗教

四六判三七二頁
定價一圓三十錢

(文學博士佐野麟也氏評) 私は現代日本の文學に對しては門外漢です。けれども吉田さんの此の本を読んで感ずることは、日本の文學者にも、こんなに眞剣に人生問題に考へを潜める人があるのかと云ふ……何だか知己に接したやうな感じですが。文學者の持つ特有な直覺的な鋭いしかも繊細な感覺に依つて捕へられた人生の眞理に年若い多くの人々は教へられるでせう。

高神覺昇著

職時體制版 近刊

隨筆苦惱を超越するもの

四六判三五三頁
定價七十八錢

名著「般若心經講義」を公けにされた高神師は、今また技にその全人的學殖と體驗と熱情とを打つて一丸とした心血の書を世に贈られる。隨筆、感想、いづれも題材を日常に生起する事象のなかに採り、或は時局を談じ、或は哲學を語り、而してそこに深奥な佛教の眞髓を啓示される。今や祖國日本の内外多難なるとき明日の日本を背負うて立つ人々の、これは魂の糧である。

高神覺昇著

隨筆佛教と人生

四六判三八六頁
定價一圓五十錢

この書は、著者が佛教を語りつつ人生を歩んでこられた貴重なる人生記録だと云へよう。收むるところの隨筆、感想はいづれも佛教の新精神を以つて人間を論じ、社會を談じ、そこに人生不滅の眞意を説いたものであつて、高神師の豊かなる學殖と體驗の尊い結晶たるざるはない。而も流れる水の如き坦々たる筆致は、讀者をして心底から沁々と同感させずには措かない。

田部重治著

崩え出づる心

四六判三〇六頁
定價一圓三十錢

『人生の旅』を経て本書に至り、著者の心境は益々深え、その精神は更に美しき飛躍を遂げた。著者の題材が多様多様になつて来たことは、この隨筆集の著しき特色である。收めるもの五十篇、自叙傳あり、文學に關する感想あり、時事問題、ひいては人生に關する批判あり、冥想録がある。執れも著者独自の思想に依つて裏附けられ、豊かな詩的情操がそれらを買いてゐる。

田部重治著

山への思慕

四六判五七〇頁
定價一圓三十錢

我國山岳界の慈父、田部重治教授が、名著『山と溪谷』以後の山や溪谷、高原に關する隨筆紀行を収録したものの。外にジョン・アディントン・シモンズの翻譯『アルプスへの思慕』一篇がある。清純な山の蕪りの充滿する本書は、蓋し我々喧噪に追はれる都會生活者にとつて自然の曠きであると同時に、それはまた爐邊の物語である。(『東洋大學新聞』評)

田部重治著

心の行方を追うて

四六判三六八頁
定價一圓三十錢

『心の行方を追うて』を繙いたとき、私は長い旅のあとで、故郷の緑の野に歸つて来たやうななつかしさを覺えた。この隨筆は人生から始まり、常にその靜かな深い人生觀が各篇すべてに裏附けされてゐる。それらはすべて人生の縁の野に生じた生きた樹である。而も常に基礎的なものから出發する著者の心のゆとりは、われわれ若輩を深く反省させる。(本多顯彰氏評)

田部重治著

人生の旅

四六判三四六頁
定價一圓五十錢

本書は著者の貴重な「人生の旅」の記録である。つねに山を愛し自然の懷を住家とする著者に依り、人間生活のなかにも新鮮な自然性が發見された。氏の登山紀行のなかには温い人間の心臓が感じられるが、一方この『人生の旅』のなかには自然の子である人間の姿が示される。近代文明の煩幕のなかでこころした人間性の新鮮さを、見出すことは何んといふ喜びであらう。

903
31

25-年 8 月 7 日 25

田	田	田	田	田	田	田	田

門 院 元 濟

終

